

昭和初期における「意識の流れ」受容を巡って ジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』と川端康成の「針と硝子と霧」

メベッド・シェリフ

キーワード 川端康成、フロイト、ジェームズ・ジョイス、「意識の流れ」

1.0 序論

川端康成（1899年－1972年）は20世紀の日本文学の代表的短編「伊豆の踊子」（『文芸時代』、1926年）の作家であり、戦後、日本の美を追求する長編小説『雪国』、『千羽鶴』、『古都』が世界中で翻訳され、日本人として初めて1968年にノーベル文学賞を受賞し、世界の文学の頂点に立った作家である。このように、川端の作品は日本の文化の結晶と考える人も少なくないだろう。しかしながら、川端は若いころヨーロッパの文芸に深い関心を持っていたことは確かである。彼の文学思想と技術は日本の古典や近代文学の影響が重要であると同時に、東京帝国大学の学生のころから、ドストエフスキー（1821－1881）ポー（1809－1849）、ゾラ（1840－1902）、キップリング（1865－1936）、チェーホフ（1860－1904）の小説やショーペンハウアー（1788－1860）の哲学やE. M. フォースター（1879－1970）の文芸思想などを読み、それによって文学作品の書き方について様々なことを学んだということも考えられる。川端は勿論国内だけでなく、ヨーロッパの思想や文芸にも精通していたと言えるのである。また、川端は新感覚派、ダダ主義、シュールレアリスム、「意識の流れ」、などの斬新な文章手法を試み、ヨーロッパから輸入された作法を数多く実験していた。これらの前衛的作法の中、1930年代、特に「意識の流れ」に興味を持ち、自分の小説に取り入れたのである。本文ではこの点について考察していきたいと思う。

2.0 意識の流れの起源

「意識の流れ」の代表作家はジェームズ・ジョイス（James Joyce, 1882－1941）である。英語圏でジョイスは広く読まれ尊敬されている作家である。ジョイス

と同様バージニア・ウルフ（1882-1941）も「意識の流れ」の優れた作品を残した。この二人の作家より、早く現れたのはドロシー・リチャードソン（1873-1957）である。彼女の『尖った屋根』（1915年）は「意識の流れ」を用いた最初の小説と見なされている。世紀末のロンドンと数多くの個性的な人物が主人公ミリアムの意識を通して描かれている。また、ジョイスは1916年（Huebsch社）に『若き日の芸術家の肖像』（A Portrait of the Artist as a Young Man）を出版したが、既に、1914年から1915年にかけて、雑誌『エゴイスト（Egoist）』に連載していた。『若き日の芸術家の肖像』にも部分的に「意識の流れ」の要素が現れているが、全編にわたって、リチャードソンの小説だけが本格的な「意識の流れ」を用いていたと言えよう。しかし、ジョイスは同時にこの作法を発展させたという解釈もできないことはない。また、「意識の流れ」によく使われる文体たる「内的独白」（interior monologue）と呼ばれる手法はジョイスやリチャードソンが作り出したものではなく、エドゥアール・デュジャルダン（1861-1949）のLes Lauriers Sont Coupés（1888）で初めて用いられたということを念頭に置くべきである。「意識の流れ」の起源は一人の作家というよりも哲学や文学の時代精神フナイトガイストと考えた方が良いかも知れない。

ジョイスは「意識の流れ」の代表作『ユリシーズ』（Ulysses）を主に一次世界大戦中の1914年から1918年の間に執筆し、1918年、エズラ・パウンド（Ezra Pound）の協力によって『ユリシーズ』を「The Little Review」（1918年）と『The Egoist』（1919年）で連載を始めた。単行本は、1922年にパリの「Shakespeare and Company」によって発表された。（同じ1922年にはバージニア・ウルフの代表作『ダロウェイ夫人』（Mrs. Dalloway）も発表されている。）

2. 1 ジェームス・ジョイスの日本上陸

日本で始めてジョイスの名が活字で現れたのは、1918年3月の『学燈』に収録される「画家の肖像」という文章である。ⁱⁱⁱその評論の著者は野口米次郎であり、日本人で最も早くジョイスの価値を把握したと考えられる。彼はジョイスの『若き日の芸術家の肖像』を紹介している。^{iv}

野口の紹介から1年半くらい経ったころ、芥川龍之介は、「我鬼窟日録」に「丸善より本来。コンラッド2、ジョイス2」というように書いている。そして、「澄江堂雑記」（1920年8月20日）に『若き日の芸術家の肖像』を高く評価しているため、「ジョイス2」の中の一冊が「肖像」であるということが断定できる。^v

堀口大学（1892年-1981年）は「小説の新形式としての内的独白」（『新潮』1925年8月）という評論によってさらにジョイスを紹介した。この短い評論は

〈内的独白〉の歴史とジョイスの方法について簡単に説明している。堀口によれば、ジョイスのスタイルの利点は、人間の「心中の最も奥深い所に束の間起伏する思念を一旦ちわれ等の意識下に生まれて消えるその場かぎりの思念—のムウヴメンをありのままに」描くということの特徴として指摘している。さらに、この新しいスタイルはヨーロッパに影響のある文芸運動だと説明し、日本の若い作家も「意識の流れ」を真似るだろうと予測している。

ジョイスの文章の和訳が初めて出版されたのは、1929年2月「ジョイスの『ユリシーズ』(『改造』)である。その中で、評論家の土居光知はジョイスの手法を紹介している。この解説は土居自身の言葉ではなく数人の英国の新聞や雑誌の評論を日本語に訳したものである。その中から、まず、新聞『ヨークシャー・ポスト』(Yorkshire Post)紙の記者の言葉を引用してみよう。

意識の流れと心の半ば無意識的な情態の絶対に率直な叙述として、この書は技巧上非常に興味ある試みである。今日まで芸術と人生とを距ててみた最後の慎み、最後の障壁はとり除かれたⁱⁱⁱ

また、雑誌『ニュー・レパブリック』(New Republic)のエドモンド・ウイルソンはこう書いている。

どっしりした組織をもつ作品であって、作者は、目的なく些細な印象から次の些細な印象へと漂い流れ、記憶や感覚や抑制などによって、混雑し迷はされる意識情態—かつて明るみに出されたことのない、潜在意識を出し、材料の厳密の選択によって見事に成功してゐる。…

土居は『ユリシーズ』のスタイルの説明の後、10頁の翻訳を紹介している。この評論は、『新潮』という雑誌に掲載されたために、大勢の文学者によって読まれたに違いない。また、土居の部分訳の大きな特徴は、ジョイスの原文にない括弧の使用である。その括弧は「意識の流れ」の部分(つまり主人公の心の中の想念や無意識的な思いの部分)を囲む。括弧の使用は、その後に出た伊藤整の「意識の流れ」の作品(「機構の絶対性」(『新化学的文芸』、1930年11月))や川端の作品(「針と硝子と霧」(1930年11月))にも見られるが、その使用は土居の訳の影響かどうかは明確できない。しかし、その可能性はあるのであろう。

2.2 伊藤整、永松定、辻野久憲による『ユリシーズ』の翻訳

伊藤整(1905-1969)、永松定(1904-1985)、辻野久憲(1908-1937)はパ

りでの『ユリシーズ』(1922)の発表から8年後に、全訳を試みた。18章の中、最初の8章は『詩・現実』(1930年-1931年)¹⁰⁾に連載され、全訳は1931年12月に上巻が、1934年5月に下巻が第一書房によって出版された。また、伊藤と永松による改訳は1955年に現れた。¹¹⁾伊藤整の仕事は翻訳だけではなく、彼は『詩・現実』の1号(1930年6月)に、ジョイスのテクニクに関する論文「ジェイムズ・ジョイスのメトオド『意識の流れ』に就いて」を発表している。また、1930年7月にジョイスの短編集『ダブリン市民』から「イヴライン」(“Eveline”(『一橋文芸』)の和訳を発表した。

伊藤整が1930年の夏から始めたジョイスの紹介活動は、日本におけるジョイスのブームに拍車をかけたということが考えられる。伊藤の「ユリシーズ」訳が出てから、追うように小野松二と横堀富雄の共訳『若き日の芸術家の肖像』(大阪:創元社、1932年10月)が現れた。森田草平等による岩波文庫の「ユリシーズ」(1932年2月-1935年10月)の翻訳も出た。日本への「意識の流れ」の紹介を巡って、伊藤整の果たした役割は大きかったと考えられる。後に明らかにするように、特に川端の立場から伊藤の仕事が重要であった。

3.0 川端と「意識の流れ」との出会い

川端康成が「意識の流れ」の影響を受けたという事実は、川端が書いた評論を読んで分ることである。川端とジョイスを結びつける最も明確な証拠は川端著の1958年の評論「作家に聞く」(新潮全集33巻、558頁)である。¹²⁾そこで川端は伊藤の翻訳を読んで、原文を購入し、比較して、真似てみたというように書いている。これと別に、川端がジョイスの文学を誉めるような、コメントも複数ある。ここで実例を見てみよう。川端が1933年1月に出した「ジェイムズ・ジョイスの『若き日の芸術家の肖像』」の中で『ユリシーズ』について次のように書いている。

ジェイムズ・ジョイスの「ユリシーズ」は、文学の未曾有の破壊であり、同時にまた建設であった。文学のための新しい宇宙の創造であった。既に発達の極に着して、衰退の外なきかに見えた小説は、ここに未耕の緑野、未踏の道を発見して、開拓の希望に甦った。ジョイスの知ることなしに、新しい文学の出発はない。従来の小説は広い人間の心の半ばに盲目であった。深い現実の扉を叩いてみようともしなかったと、我々は彼の作品からはじめて教へられて、愕然とするのである。

このように川端はジョイスの『ユリシーズ』を「文学の未曾有の破壊であり、同時にまた建設であった」と言って絶賛している。また同評論で『ユリシーズ』だけではなく、『若き日の芸術家の肖像』も誉めている。そして、原作も小野松二と横堀富雄共訳の邦訳にも言及している。

また川端がジョイスの小説に言及する評論はいくつかある。その中の「ジョイスの言葉から」(1932)ⁱⁱⁱという評論を着眼したい。そこで川端によれば「ワタク・イン・プログレス」(のち『フィナガンズ・ウエイク』)は作家自身だけのユニークな言語によって作られた作品である。ジョイスの言語は言葉の響きのみでも価値があり、ジョイスが国境を超える「謎の暗号」を作ったと説明している。この暗号は音楽や絵画のように人間が直感で分るものであると川端が誉めている。ⁱⁱⁱ

また川端はジョイスの思想から影響を与えられた証拠として、1970年に伊藤整の死の追悼として書いた文章「伊藤 整」を考察しておきたい。

…(伊藤整は)二五歳で、『ジェイムズ・ジョイスのメトオド「意識の流れ」に就いて』(『詩・現実』)を發表し、永松定氏、辻野久憲と共訳で、『ユリシーズ』を連載し、前年には、『プルウストとジョイスの文学法』(雑誌「思想」)を評論し、『ユリシイズ』上巻(第一書房)を出版し、その年は処女評論集『新心理主義文学』(厚生閣)を刊行しているから、かえって**横光氏や私に影響と教導を与えもしたのであった。**(強調は著者)

こうして、川端は伊藤整の仕事を経由して、ジョイスの影響を受けたということも明らかになる。伊藤整の仕事とジョイスの『ユリシーズ』は川端の文芸に少なくとも一時に大きなインパクトをもたらした。特に伊藤整による『ユリシイズ』の刊行の直ぐ後に發表された短編「針と硝子と霧」(1930年11月)と「水晶幻想」(1931年1月)は明確にジョイスの作品の影響下にある実験小説である。川端がジョイスから受けた影響は伊藤整の仲介なしにはありえないと考えられる。川端は1941年に出た「小説の構成」ⁱⁱⁱⁱでは、「意識の流れ」を説明する時、伊藤整が書いた理論を長々と一頁も引用する。^{iv}そして、日本の「意識の流れ」の作品として、横光利一の「機械」と自分の短編「水晶幻想」という2作の例を挙げている。

4.0 ジョイスの『ユリシーズ』と川端の「針と硝子と霧」

上に触れたとおり、川端の「意識の流れ」（1931年1月）の代表作は「水晶幻想」であるが、ここで、先に発表された「針と硝子と霧」（1930年11月）を取り上げ、ジョイスの大作と比較してみたい。まず、ジョイスの本は約800頁の長編であり、「針と硝子と霧」は20頁という短いものである。『ユリシーズ』はその長さと同様に、内容は一日という短い期間である。それに対して、川端の短編は数日間の出来事を描く物語である。また、ジョイスはホメロス（紀元前8世紀）の『オデュッセイア』の大叙事詩の構造を借り、重要人物も、『オデュッセイア』中の人物の特徴を1904年のダブリンの市民の性格に書き込み、伊藤整がいうように「現代人と古典の中の人物との照応によって、人間の本質をとらえようとする態度をもって描かれている。」しかしながら、「針と硝子と霧」はそのような古典的な要素がない。また、ここで考察したい人物はジョイスの主人公ブルームと「針と硝子と霧」の主人公朝子の二人である。朝子は神経症を患っていることが明らかであるに対して、ブルームは比較的に正常である。

このような構造、場面や人物設定の違いにもかかわらず、共通するのは叙述手法、テーマ、作家の態度という三つである。まず叙述手法を取り上げたい。川端の作品では二つの声がある。語り手の声は外的要素を描く。しかしその語り手の声と別にもう一つの声がある。その声は主人公の内的叙述である。語り手は主人公の朝子の思いを説明するのではなく、彼女の内的叙述そのものが再現されている。ジョイスの作品もこのような平行する叙述のモードがある。両作品において語り手の叙述と主人公の想念が交互に現われる。川端の作品はさらに語り手の声と主人公の内的叙述を容易に区別できるように、後者は括弧の中に綴られている。ジョイスの作品ではそのような読者サービスはないが、内容的には大きな違いがない。語り手の叙述と主人公の考えていることそのものを平行に表現するという工夫はジョイスが文学にもたらした先駆的貢献であり、川端がその点においてジョイスの影響を受けたということが考えられる。⁶⁾

意図的かどうか判然としないが『ユリシーズ』と「針と硝子と霧」の間にテーマ的な共通点がある。ジョイスの主人公リアポルド・ブルームの最も大きな悩みは、妻マリオンの不倫である。「針と硝子と霧」にも主人公の夫の浮気の問題が中心にある。その他、大きな共通するテーマがあるので、まずジョイスの小説を考察してみる。キルケ（Circe）章というのは『ユリシーズ』の後半にあるエピソードである。その中、ブルームは数多くの幻想を見る。舞台は、ダブリンの遊郭である（不倫の町）。ブルームがそこで見る数々の幻想の中で、彼がア

イルランドの救世主となり、町全体の英雄であるという嬉しい幻想から、自分の心の中に犯した罪によって裁判にかけられ、有罪判決を受けるという嫌な幻想まで見る。つまり、キルケではブルームの内的世界（無意識）を自由に飛び回る一話である。そして、キルケの最後のイメージは、10年前に生まれて10日で世を去った息子の幻である。息子は10歳の子供の姿として現れる。その息子の名前はルーディであった。ルーディが死んでからブルームは一度も妻と性的関係を持ったことがない。よって息子の死はブルームの性生活の終止符という意味になっているようである。言わば息子の死は男としての失格を象徴しながら、セックスレスの妻を不倫へと押し出した原因にもなっている。これはフロイトがいうように、人間の無意識の奥底にある繁殖願望という衝動が最も大きな影響力を持つというようにも解釈できるかも知れない。また、成長したルーディの幻はその繁殖願望の復活の願いであるとも解釈できるだろう。

川端の『針と硝子と霧』の主人公朝子は、ブルームと多くの共通点を持っている。まず、上にも触れたように、ブルームと同様、夫の不倫のせいで彼女は不安な精神状態に陥っている。また、ブルームと同じく、朝子は赤ん坊の死によるトラウマが全生活の支障となっている。彼女の出産歴は、この一度の死産のみの経験である。そして、死産によって、妊娠線が残っている。体にある「傷跡」は心の傷を象徴しているのであろう。死産以降に身籠ることがないということも、彼女の繁殖機能に問題が起きたという意味をするのだろう。また朝子は心のどこかで、子供ができないということが夫の浮気の原因であると考えているかも知れない。そして小説の最後のシーンでは、ブルームと同様、朝子は遊郭に入り、10行という短い叙述にもかかわらず、数多くの無意識的思考が彼女の頭に浮かび上がる。それらの最後のイメージの一部をここで紹介する。

（…自身が、その女（不倫相手のこと）であった。吹雪。雪の田舎の夜景。三つ児の彼女の両腿をつかんで、その雪の庭へ、おしっこをさせている父。霧の海の船。弟と旅をしよう。子供が生きていたら。小児科病院の診察室。その部屋の光る器具とガラスの清潔。その窓へ流れ込む霧。）（強調は著者による）

テキストで、この引用は括弧の中に現れているので、朝子の内的思考として、考えるべきである。ブルームと違って、彼女は正気を取り戻さなく、そのまま精神病院に入院して、短編は終わる。上記の引用は彼女の最後の〈内的独白〉である。引用の最後のイメージとはジョイスのキルケと同様、亡くなった子供である。すなわち、朝子の無意識の最も影響力のあるイメージが繁殖への願望

と絶望であると考えざるべきではないだろうか。子供がなくなって、身籠ることができなくなった。夫は別の女性と付き合いだしたという観念の連鎖であるのだろう。

次はジョイスの『ユリシーズ』のキルケの最後のイメージをここで紹介したいと思う。

(沈黙して、考え深そうに、気を配って、秘密の鍵を握っているものの態度で、唇に手を当てて、見張っている。黒い壁を背景にして、一つの人影が、イートン校の制服を着、硝子の靴を穿き、小さい青銅のヘルメット帽を被り、手に本を持って仙女の変え子(チェインジリング)、神隠しに遇った十一歳の貴公子の姿で、徐々に現れ出る。彼は微笑し、頁に接吻しながら、右から左に、声を立てずに読む。)

ブルーム

(愕然として呼ぶが、その声は人に聞こえない。) ルーディよ!

ルーディ

(ブルームの眼を擬視しながら、それが見えない風で、接吻し、微笑しながら、読みつづける彼の顔は優さ形で紅紫色を帯びている。服にはダイヤモンドとルビーの釦が付いている。空いた左の手には、紫色の蝶結の付いた細い象牙の杖を持っている。チョッキのポケットから白い子羊が覗いている。)

こうして、ジョイスはブルームが見ている幻そのものを描いている。これは同小説の多くの章で用いられる〈内的独白〉ではなく、語り手による人物の感覚を表現する手法である。ブルームの繁殖願望と絶望の象徴である死んだ息子の育てたイメージである。その手法によって、死んだ子供が生きているというイメージは心の奥底から浮かび上がるという点も再び強調しておきたい。ジョイスの『ユリシーズ』と川端の実験的短編「針と硝子と霧」はテーマ的な類似性のある箇所が多いが、最も重要な共通点は主人公の心に隠れた思考を表に出そうとする作家の態度であると思える。またその思考は、両作品において繁殖の願望と絶望をはらむ気持であるということが興味深いと思える。

5.0 結論

「意識の流れ」という文芸運動は、スタイルの運動ではなく、主人公の無意

識をリアルに描くという態度をとる作家の運動である。^{vi}この目的を果たすために、内的独白や、ジョイスの引用で見られる語り手による幻想の描写だけではなく、様々な表現法や文体を用いることができる。本稿で取り上げた作品は両方、「意識の流れ」を表現するために、様々な表現法を用いている。どこまで、川端の作品がジョイスの模倣であるか、どこまで、自分自身の創造で、「意識の流れ」の作品を作り出したかということは計る方法はないだろう。「針と硝子と霧」を書いた当時（1930年10月ころ）には、『ユリシーズ』の最初の二話だけが邦訳されていた（つまり本稿で取り上げたキルケはまだ日本語で紹介されていなかった）^{vii}。両作品のテーマ的な共通点や舞台設定の共通点は偶然だということが考えられないことではない。しかし、両作品において作家は、主人公の心に潜んでいる最も根本的な願望を取り出そうとしていたということは、フロイトが20世紀の始めに遂げた無意識の発見に関係しているのではないかと思える。「意識の流れ」は人間の性格の最も隠れていた領域、しかも、ときにその存在さえ判明され始めたばかりの領域に光を当てる新しい文芸であった。

注

- i 川端康成記念会（1984）『川端康成全集補巻』、「大正9年大正10年読書ノート」新潮、501-515頁
- ii ハンプリー（1954年）9頁
- iii 太田三郎「ジェイムズ・ジョイスの紹介と影響」1955『学苑』昭和30年4月号、14頁
- iv 野口によれば、ジョイスのテクニクは「清澄なきびきびした点、無駄のない、省略法」した文章であるという
- v 太田三郎「ジェイムズ・ジョイスの紹介と影響」1955『学苑』昭和30年4月号、14頁
- vi 堀口大学1925年「小説の新形式としての『内的独白』」『新潮』1925年8月9頁
- vii 土居光知（1929年）「ヂョイスのユリシイズ」『改造2月号』34頁
- viii 『詩・現実』2号（1930年9月）：Telemachus, Nestor
『詩・現実』3号（1930年11月）：Proteus, Calypso, Louts-eaters, Hades
『詩・現実』4号（1931年2月）：Aeolus
『詩・現実』5号（1931年6月）：Lestrygonians
- ix ジョイス（1955）『ユリシーズ』（現代世界文学全集）新潮社

- x ところで、この「作家に聞く」では、川端はジョイスの影響が重要ではなかったと主張するが、この論文では意識の流れは深く影響を及ぼしたということを示そうとしている。
- xi 川端康成『川端康成全集』32巻「ジョイスの言葉から」554頁
- xii 言葉の意味作用を超える文芸は川端文学の目標の一つである。彼は、子供のころ、古典を読み、その意味が分らなかつたが、音の響きだけを喜んでいたという。また、「文章」（1934年）では、文学は媒介芸術と言い、言語は人間の心を束縛すると説明する。この点に絵画や音楽は直接人間の感情を示すことができるため、文芸より優れているというのである。この思想があったからこそ、ジョイスの特殊の言語に興味を持っただろう。
- xiii 川端康成 1941 『小説の構成』三笠書房
- xiv 同上、126－7頁
- xv ジョイスは所謂内的独白手法を発明した訳ではなく、普通の叙述の中に途切れないように内的独白を用いたということはジョイスの優れたところである。
- xvi これに関しては、Cohn, Dorrit (1978) Chatman, Seymour (1978) Humphrey, Robert (1954) を参照。
- xvii しかしながら、川端は原作を少なくとも部分的に読んでいたということは明らかになっている。(川端康成 (1984) 『川端康成全集33巻』「作家に聞く」新潮558頁。)

参考文献

- Cohn, Dorrit (1978) Transparent minds : narrative modes for presenting consciousness in fiction. Princeton, N.J. : Princeton University Press
- Chatman, Seymour (1978) Story and discourse narrative structure in fiction and film. Ithaca : Cornell University Press
- Humphrey, Robert (1954) Stream of consciousness in the modern novel. Berkeley : University of California Press
- 川端康成記念会 (1984) 『川端康成全集補巻』、「大正9年大正10年読書ノート」新潮
- 川端康成 (1941) 『小説の構成』三笠書房
- ジョイス (1955) 『ユリシーズ』(現代世界文学全集) 新潮社
- 太田三郎「ジェイムズ・ジョイスの紹介と影響」1955『学苑』昭和30年4月号

土居光知（1929年）「ヂョイスのユリシイズ」『改造』 2月号

堀口大学1925年「小説の新形式としての『内的独白』」『新潮』 1925年 8月

